

落語「能狂言」の紹介と比較

Introduction and comparison of Rakugo "Noh and Kyogen"

竹内 淳

要旨

本論は、「落語」と「狂言」のあり方を、ある一面からアプローチし、それぞれの芸能の一領域を捉えることを主眼とするものである。なお、本研究ノートは、平成21年12月23日、関西能楽フォーラム「六麓会」で発表したものを先学諸氏からの指摘を参考に加筆したものである。

キーワード: 落語、オノマトペ、能狂言、キーワード

Keywords: Rakugo, Onomatopoeia, Imitative, Noh・Kyogen, keywords

1. はじめに

「落語」と「能・狂言」の関わりを調べる事は、方法論として興味深いと、かねてから考えていた。もちろん先行研究も数多存在する。

例えば、爆笑王として人口に膾炙している、初代桂春團治（明治11年～昭和9年）は落語の中に既存の古典落語にはない「オノマトペ」を多用する事で一時代を築いた。そのオノマトペの使用法などは、狂言の舞台を彷彿とさせるものがある

2. 落語「へっつい盗人」と狂言「盆山」のオノマトペの検証

どちらも、主眼は市井の人が目的完遂のため「盗人」になるという、人間の弱い心理を突いたところにあり、その点でこの二つは同工異曲である。

念のため、両方の梗概を挙げる。

狂言「盆山」 近頃世間では盆山（盆の上に砂礫で山岳のさまを表した置物）が大流行である。この辺りの者も、この盆山をたくさん持っている何某に一つ所望したが断られ、あまりの

欲しさに今宵、盗みにやってくる。

葭垣を用意の鋸で挽くと「ズカズカズカズカ、メリメリメリ」と大きな音がする。(後略)

(狂言総覧 能楽書林)

落語「へっつい盗人」 友達が引っ越しをしたので、何か祝いの品を贈ろうと相談しているところへ、その女房が来て、へっつい(竈)が欲しいと匂わせて行った。へっついを買いたくても金がない二人は道具屋の前においてあるへっついを盗もうという事になり、天秤棒を持って夜盗みに行く。ところが、一人がへまばかりやって石燈籠の頭を落としたりするので、二人はついに古道具屋の前でけんかを始めた。(後略)

(増補 落語事典 青蛙房)

肝心の擬音であるが、盆山は、「ズカズカ、メリメリメリ」が最初の擬音、その後「犬」「猿」「鯛」を真似てオトす。それぞれ「びよう、びよう」「キヤキヤキヤ」「たいたいたい」と口真似する。

一方、「へっつい盗人」の方は(初代春團治の演出・現笑福亭仁鶴もこの演出)

道具屋の前で、

「道具屋の表に竹の垣が立て掛けたあんねんさかい、それをソノ音のせんようにそーとこっち退けちゅうねん」

「ふん」

「音さすなよ」

「ふん」

「さ、早よ取り」

「ふん」

ガラガッチガッ

「おいおい、おいおい。大っきい音さしな・音がするが。そーと行きいな」

「ふん」

ガラガラ ガラガラガッチガッチ ガラガラガッチガッチ ドンガラガッターブプー

(中略)

「ブプー ちゅうのは

「表に三輪車の車置いたってね、デふらふらーとふらつく拍子にそのラッパへ手支えてん」

「…二度鳴ったがな」

「あんまりええ音やさかい、また押さえてみた」(後略)

オノマトペを多用している特徴的なところを抜き出した。

この部分だけを捉えて、初代春團治が狂言を模倣していたと断じることにはできないが、観客を笑わせるためにとった「音的手法」が似通っている事は事実である。

春團治だけではなく落語の中に使用されているオノマトペについて、精査すればなんらかのおもしろい結果が得られるのではないかと考える。

因みに、落語と関わりがあるとされている狂言は、

魚説法 (魚説経)

柑子俵

昆布柿

猿座頭 (猿引勾頭)

秀句傘

墨塗

花折

花子

骨皮

松山鏡

六人僧 などが考えられている。

これらに関しては、テーマが似通っているもの、台詞が似通っているもの、明らかに狂言を底辺に落語へと換骨奪胎したものがあり、それらの考察は、今後の課題としたい。

本論

ところで、本論の主たる目的は、落語に「能狂言」という演題がある事を知って貰う事である。以前、能楽研究者に落語「能狂言」の話しをした際、ご存じなかったことが、直接のきっかけであり、知って貰いたいという単純な希望の発露である。

「狂言 (能狂言)」と「落語」という芸能の目指す所が「笑」を目途とした大衆性を重んじた結果ではないかと考察する。

ご存じのとおり、落語は江戸落語と上方落語に大別されるが、そのどちらにも、この「能狂言」という落語は存在する。ただ、落語の場合、様々な形で「東西交流」がなされているので、「能狂言」という落語を演じる噺家が、東西ともに存在する、と言った方が正確である。

さて、東大落語会編「増補 落語事典」の補遺の部分に「能狂言」の記載がある。(落語事典の初版は昭和48年、今回参照の分は平成6年改訂版の7刷である平成20年分)

長いが、その部分を引用する。

「能狂言」

別名「但馬の殿様」「お能狂言」「能芝居」

梗概

殿さまがお国詰めになって、江戸から帰って来た。江戸表にあったときに見た能狂言というものがおもしろかったので、五月五日の節句にやれと家老に申しつけた。ところが、誰も能狂言を知らない。そこで、「能狂言なるものを知りおる者は城中へ申し出ずべし。ほうびの金は望み次第つかわす」という立て札をたてた。江戸からきた二人連れがこれを見て「こんなものを知らねえのか。茶番みていなもので、一番しまいにやるまいぞ、やるまいぞといってな」と話していると、城内に連れて行かれる。能狂言を教えてくださいといわれて、ろくに知らない二人は大弱り。忠臣蔵の五段目を忠五二玉という題にして教える。定九郎が与一兵衛をバツサリ切って引っ込むと、芝居なら幕をおろすのだが、能舞台だから幕も緞帳もない。お囃子連中は困るし、たまらなくなったのは斬られて倒れている与一兵衛。頭を持ち上げて「憎き定九郎かな。やるまいぞ、やるまいぞ。」

解説

上方ばなしで、上方では桑名のはなしとし、但馬の国のこととしてなかったのだが、曾我廼家が「但馬の殿様」と題して喜劇化したので、三代目円馬も東京で「但馬の殿様」でやっていた。いまは、※桂米朝がやる。サゲは能の言葉にやってはいけないの意をかけたもの。

(※米朝落語全集などに「能狂言」の記録はない。「やっている」ではなく「やったことがある」程度のニュアンスだと解釈する。)

さて、三種類の、落語「能狂言」を比較する。

三種類とは、東京 六代目 三遊亭圓生、上方 四代目 桂文我・桂文珍がそれぞれ演じた落語「能狂言」である。

圓生師

CD圓生百席34のDISC2 (SONY) を音源に使用した。(スタジオ録音分)

CDの解説で、宇野信夫氏(劇作家 昭和の黙阿弥と称せられる)が

「圓生は此の噺を大阪へ行った圓馬から教わったそうです。教わったといっても、圓生はこれを完全に「自分のもの」にして居ります。平素はあまり手がけない噺で、おそらく今この噺を勤めるのは

圓生一人ではないでしょうか。筋立てが筋立てですから、喜劇化され、新喜劇の藤山寛美によって上演されたそうです。」と語っています。

録音は昭和51（1976）年3月10日

出囃子は「狂言」に合わせて高座では珍しく歌入りの『末広がり』『人が笠をさすなら』である。

圓生師自身は、ライナーノーツに

「お狂言をご覧になったことがない方には、あまりおもしろくないかも知れません。三代目圓馬師のを聞いて覚えました。圓馬師の口演速記も残っております。他にやる人はございません。実演の場合、サゲは「やるまいぞ、やるまいぞ」と言いながら立ち上がり、橋掛りのところで高座をおります。圓馬師は坐ったままでしたが、あたくしはお狂言の気分を出すために立ち、退場しながら形のサゲにしております。レコードではどうにもなりませんので、芝居の能狂言の場面で幕切れに用いるお囃子を「やるまいぞ、やるまいぞ」にかぶせ、橋掛りをさがっていく気分を音で表現したわけです。これがそのままウケのお囃子になります。上がりのお囃子はお狂言に因み、長唄の『末広がり』の一節です。『仮名手本忠臣蔵』五段目を狂言仕立てにするわけですが、今歌舞伎でやる五段目は大分演出が変わってしまい、この場面はありません。文楽のほうを見ればおわかりになるでしょう。（後略）

圓生師のサゲ

師の落語を見た時は、扇を手に立ち上がって袖に向かって歩きながら「やるまいぞ、やるまいぞ」と下がっていったが、なるほど師がおっしゃるとおりタイミングを外してしまうと、なんとも間の抜けたサゲになってしまう。

しかしながら、このCDのサゲが最善とも思われない。

文我師

CDも東芝EMIから発売されているが、「復活珍品上落語集」（四代目桂文我 燃焼社刊）から拾う。（p112～）

（前略）三代目三遊亭圓馬の速記集で、「圓馬十八番」という本です。実は、この本に『能狂言』の速記が載っていたのです。『但馬の殿様』という題で載っていたこのネタは、内容は昔のものでも、手を加えればかなり面白くなるという予感がするものでした。東京落語の六代目・三遊亭圓生師の速記を読んだり、録音を聴いたりもしましたが、やはり圓馬の速記から工夫されたようです。（中略）忠臣蔵を演題にしていますが、いっそのこと誰でも知っている、日本昔話の桃太郎を『桃大名』として演じることにしました。

サゲで、「やるまいぞ、やるまいぞ」といいながら、噺家が立ち上がって楽屋に入ってしまうという演出があるのですが、どうもしっくりきません。（後略）

文我師のサゲ

座布団に座ったまま。言葉の上で「やるまいぞ」を使用している。

「いやあっぱれであった。これから後は禄を与える故、城内にとどまり、毎日のように能狂言を行うよう。よいな。」

「ええっ。おいえらいことになったで。きょうは『桃太郎』でこまかしたけど、そない毎日も演られへんで」

「しゃあないがな。あしたは『浦島太郎』を演ろか」

「嫌やがな。そのうちに嘘がバレたらお手打ちになるで。命あつての物種や。五十両だけでもろて、早う余所の町へ行つた方がええで」

「そうやな…ええ、お殿様。私共もそうさせていただきたいところではございますが、実は隣の町からもお呼びが掛かっておりますので、これにて失礼をさせていただきとう存じます」

「何ッ。隣の町へ参るとな。ならぬ！皆の者。この者達を他へは、アーラ、やるまいぞ。やるまいぞ」

このサゲは、すっきりしている。ただ、ここでは「向こうには遣らぬ（行かさない）」の意味の「やるまいぞ」である事を記憶して貰いたい。

三人目の桂文珍師

「能狂言」を原作とはしているが、タイトルからもわかるとおり、現代に時代設定をあらためた新作（改作）である。

桂文珍師「商社殺油地獄（能狂言）」 2008年4月7日録音

桂文珍10夜連続独演会（YOSHIMOTO WORKS）第四夜のDVDから
解説書のインタビューで文珍師は、

—この日のトリネタが『能狂言』をもとにした『商社殺油地獄』でした。

「僕は十五年間、関西大学で教鞭を執って、慶応義塾大学でも講師をしました。いずれの学生も、日本人やのに日本の伝統芸能のことなどほとんど知りませんでした。あるとき、外国人留学生の集會に招聘されたことがありました。東京大学や京都大学、大阪大学など、国立大学を中心に中国人、アメリカ人、フランス人、アルジェリア人などの留学生がたくさん来てはってね。その人たちが日本の古いことを実に良く知ってたんですね。それも見事に。その時に、あっ、これは面白い。これはまさに『能狂言』で使える、と思って。それで、この噺をやり始めたんです。」

また、小佐田定雄氏の演目解説によると、

「これも、三遊亭圓生師が演じていた『能狂言』という噺を文珍化した一席です。もともとは上方落語で『旅ネタ』のジャンルに入っていました。圓生型では江戸時代の出来事になっており、二人の旅の落語家が、能狂言を見たいというお殿様の前で歌舞伎の『仮名手本忠臣蔵』五段目山崎街道

の場を、狂言風に演じることになっています。それを現代の中東に舞台を移し、狂言の題材を『天オバカボン』の世界にしたのは今から二十年前のことで（中略）本物の能狂言と同様に、舞台に囃子方が実際にズラリと並んで演奏するという豪華な演出を考えたのは文珍さんです。（後略）

文珍師のサゲ

舞台が中東である事は前述のとおり、その国の王様に、にわか仕立ての素人狂言を披露する。狙いは、その国に派遣されている商社が石油の利権を獲得するため。

「王様、われわれにOPECの枠よりもたくさん石油を売っていただけないでしょうか？」

「オウ、石油はやるまいぞ、やるまいぞ。」

これは、「お前にはやらないぞ」の意味の「やるまいぞ」である。

以下の点を考察してまとめにかえる

① 「実際、落語のスポットが「狂言」にあたっているのに、なぜタイトルが「能狂言」なのか？」この落語「能狂言」（あるいは、その原話）の完成時期は未詳であるが、出来上がった時点での「狂言」のあり方は、必ず「能」とセットになっており、現在のように「狂言尽くし」を含めての上演がまだ主流でなかったことが伺えるのではないかと（もっとも江戸期にも狂言尽くしは存在したが）ただ、歌舞伎・文楽などではご存じのとおり「芝居」を称して「狂言」と表現する。忠臣蔵の通し狂言、などの類である。よって、落語の別名に上がっている「能芝居」の表現が江戸時代あたりの「呼称」であったかも知れない。その場合、現行の形での落語「能狂言」は幕藩体制の中「殿さま」を誹謗・揶揄しているので「江戸時代」にそこまでの作品になったとは考えにくい。維新後の作品である可能性が高い。

② 「囃子方の描写が「締め太鼓」「笛（能管）」「鼓（小鼓）」の三種、文珍師の落語では舞台上に囃子方を登場させるが、これも前記の三種類で、「大鼓」は入っていない。」

能楽の囃子方は四種の楽器で構成されている事は、舞台を一度見れば誰にでもわかる事である。にも関わらず、落語「能狂言」の囃子方はいずれの場合も「大鼓」がない。このことは、他の楽器に比べて一般大衆に「大鼓」の認識や知名度が低かったと考察できる。

③ 「留めは三種類とも「やるまいぞ」の追い込みである。」

狂言の留めに関しても、私はCMの影響で「くさめ留め」が印象的であるが、当時の人々狂言と言えば「やるまいぞ」で終わるものだ、という固定観念（代名詞的なもの）があったのではないかと推察される。

とりあえず、落語「能狂言」を鑑賞していただきたい。